論　　文

タイ国北部における山地カレン族の文化変容

― 予　報　1 ―

飯　島　　茂

I　は じ め に

本稿は京都大学東南アジア研究センターの第1次5カ年研究計画の一環であるタイ国コアー・プロジェクトの一部として1964年6月以来開始されたタイ国北部における山地民の村落調査にもとづいて作成された予備報告である[1)]。

調査地において筆をとったために，文献的にも時間的にもいろいろな制約があり，資料の分析ははなはだ不充分である。そのため予定されているコアー・プロジェクトの本報告にあたってこの予備報告はかなり筆が加えられるであろう。ちなみに本稿の位置づけをしてみることにしよう。Levi-Strauss によると，この種の仕事は民族誌・民族学的論文・社会人類学的論文

1) この調査をおこなうにあたり，いろいろな方々にたいへんお世話になった。なかでも，つぎの方々にはひとかたならぬ御協力をいただいた。記して謝意を表したいと思う。

タイ国側　Greneral Netr Khemayodhin, National Research Council
Dr. Uti Nakaswadi, 〃
Mrs. Soontaree Suvipakit, 〃
Mr. Nirandorn Chaiyanam, Governor of Chiengmai
Mr. Aram Sutapintu, Dept. of Public Welfare, Ministry of Interior
Mr. Sayom Rattanavitchit, 〃
Mr. Prasit Dhitsavath, 〃
Mr. Vichit Phiyarom, 〃
Mr. Kaew Dechawattana, 〃
Mr. Chalermsak Intasiri, 〃
Mr. Tavon Tityien, 〃
Mr. Chart Kalayamitra, 〃
Mr. Krit Suwonsomboon, Nai Amphur Mae Sarieng
Mr. PaSorn, Nai Palat Amphur Mae Sarieng
Mr. Sutat Sousomchit, Kamnan
Mr. Tongkham SongSaeng, Dr. Boonchom Ariwongse
Mr. Supamit Ariwongse
Late Mr. Chamrats Sivichai
Mr. Kungu, Village Head of Hti To Pa & Other Villagers

日本側　在タイ国日本大使館谷口守正書記官
京都大学東南アジア研究センター関係
奥田東総長（前センター所長）・小林章農学部長（センター管理委員長）
岩村忍所長・猪木正道教授・相良惟一教授・本岡武助教授

の3段階に分類できる[2]。本稿はこのうちの第1の段階の民族誌にあたる。

カレン (Karen) 族はビルマからタイ国，さらにラオスの一部にかけて分布するシナ・チベット (Sino-Tibetan) 語族である。ビルマにおいては人口200万人以上をようし，カレン州を形成して，ビルマ連邦内の有力な勢力である。それにくらべると，タイ国内のカレン族は数も少なく，勢力も小さいけれども，それでも非タイ系民族集団としては中国系住民に次いで多数の人口を持っている。いずれにせよカレン族が山地民の間で最大の人口を持っていることだけは間違いない。

Gordon Young の1960年における推定によると，タイ国北部に住む山地民約 217,000人のうちカレン族は約71,400人を占めている[3]。そのうえカレン族はタイ国北部のほかに中部から半島部にかけての西側，すなわちビルマ国境に沿って若干分布しているので，その総数は Gordon Young の推定をかなりうわまわることだろう。さらに，それに加えて平地に定住して，すでにかなり平地住民の仏教系文化を摂取していて，政府関係の統計には〝タイ人〟として分類されているカレン族を考慮に入れると，推定人口はほぼ倍増するのではないかと思われる。

タイ国のカレン族は大別して，スコー (Skaw)，ポー (P'wo)，ブエー (B'ghwe)，トンスー (Taungthu) の四つのグループに分けることができる。一部のカレン族は前述のように平地に住み，その領域の周囲に定住しているタイ (Thai) 系やラワ (Lawa) 系[4] の住民から仏教文化の影響を受けている。しかしながら，かなりの部分のカレン族は山岳地帯に住み，〝固有の〟精霊信仰に代表されるカレン文化を保持している。

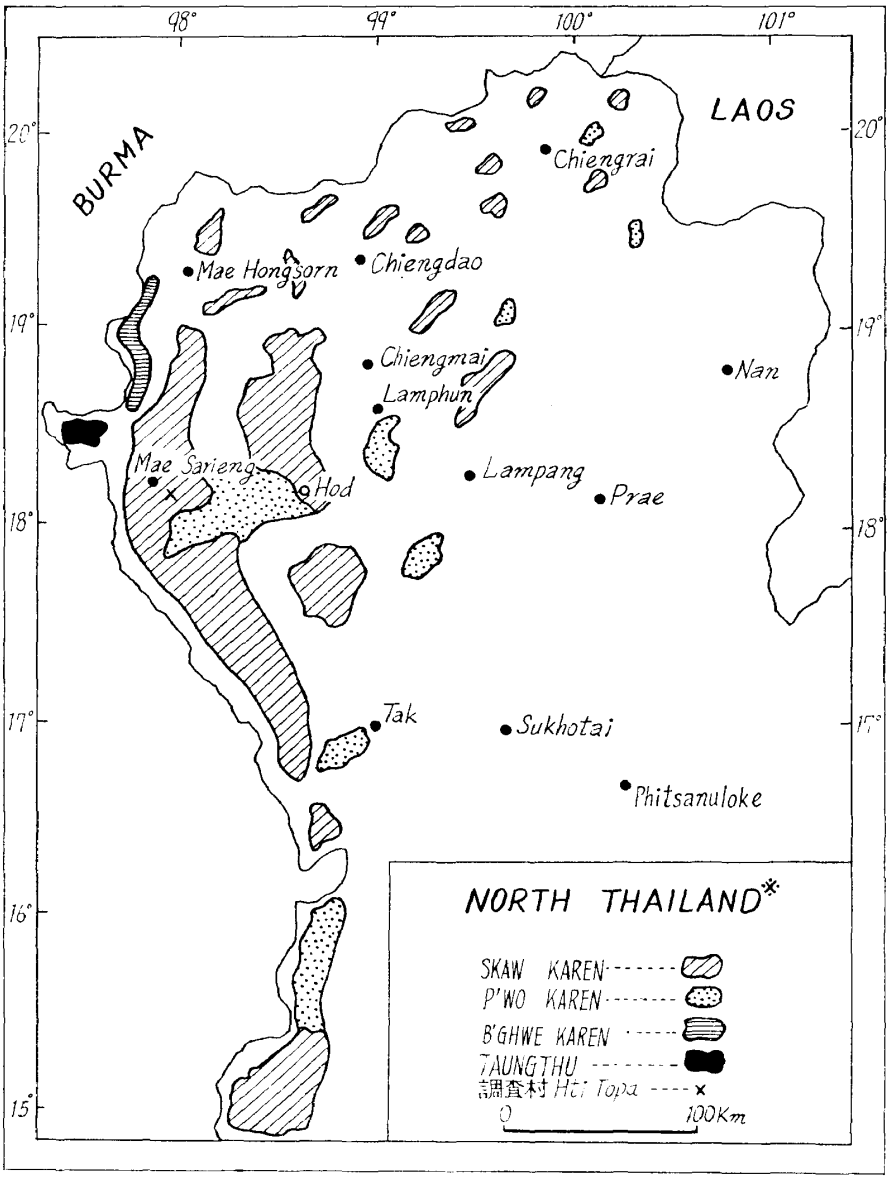
以上のようないろいろの種類のカレン族の中で，筆者は文化変容の過程をできるだけ明瞭に把握するために，焦点を山地に住むスコー・カレンにあてることにする。

スコー・カレンはタイ国においてはおもに北部地方のメホンソン (Mae Hongsorn)，チェンマイ (Chiengmai)，チェンライ (Chiengrai)，ランプン (Lamphun)，ランパン (Lampang)，プレ (Prae) などの諸県に分布している。Gordon Young によれば〝北部タイ国〟の全カレン族人口の中で，うちわに見積って45,000人がスコー・カレンである。少なくとも 280のスコー・カレンの村と 7,000戸の家があり，一戸あたりの平均は約 6.5人と推定されている[5]。

これから扱う文化変容の問題はタイ国西北部のメホンソン県メサリアン (Mae Sarieng) 地区の山岳地帯にある人口 120人，25戸の家屋からなるティトパ (Hti To Pa) 村[6]のスコー・

2) Levi-Strauss (1963): pp. 354～56
3) Young (1962) : p.85
4) Mon-Khmer 系に属すといわれ，筆者の調査地一帯では Karen 族との接触が多い。
5) Young (1962): p.69
6) この村名は実名ではなく，調査村の仮名である。仮名を使う理由は本稿以外に今後発表する報告に当然村の人たちのプライバシーに関するものがあるからである。

タイ国北部におけるカレン族の分布図



Young (1962), xiii の図より

※この地図では〝タイ化〟した Karen は含まれていないと思われる。

カレンについてなされた調査にもとづいて述べられたものである。

ティトパ村は大体北緯18度5分，東経97度48分の降雨林帯にある。雨期は通常6月から10月の5カ月間におよぶ。村の標高が約1,050メートルもあるために，熱帯地方に位置するにもかかわらず，平均気温は平地よりもかなり低めである。とりわけ11月中旬から3月中旬にかけての約5カ月間はかなり〝寒い〟冬である。しかし冬季でも日中の最高気温は 23〜25°C ぐらいになるが，大陸性気候のため夜分の冷え込みはかなりひどく，朝方には 5〜6°C 位に気温が低下することがある。

このティトパ村のカレン族の文化がこの一世紀ほどの間にたいへん変容を受けたことはいうまでもない。風俗のうえから見ても，現在ポー・カレンの男がしているような長髪をたばねたカレン特有のスタイルは山地のスコー・カレンの間ではまったく姿を消した。服装も赤と白の巻頭衣式のカレン服の代りに濃紺色の北タイ人の農民の服装がこの山村にもかなり入ってきている[7]。これと同時に山地カレンの社会は質的にも相当な変化をとげた。そこで本稿ではその変容の過程を経済，社会，政治，信仰などの諸面にわたって一瞥してみようと思う。もっとも，このあたりのカレン族はほとんど文盲なので，歴史的な資料を記録すべきすべを持っていない。そのため，これから記述する資料はまったく聞き取り調査によって集められたものなので，年代などについては多少の誤差がありうることを申し述べておこう。

ティトパ村とカレンの少年，服はカレン・スタイル

II 経　　済

このあたりの山地カレンの経済生活の基礎は焼畑による陸稲の栽培である。焼畑はカレン族のみならず，北部タイ国ではおもにアカ族（Akha），ラフ族（Lahu），リス族（Lissu），ミャオ族（Meo），ヤオ族（Yao）などの山地民がおこなっている粗放農業である。ティトパ村について焼畑農業を見ると，大体次のようにおこなわれている。

村人はカレン暦の Sale（2月中旬から3月中旬）に山に出かけてゆき，焼畑の候補地を探す。カレン暦 TePeh（3月中旬から4月中旬）と TeKu（4月中旬から5月中旬）の2カ月間にわたっては畑の候補地にある雑木や下草の伐採をおこなう。カレン暦 LahSa（5月中旬から6月中旬）には伐採の済んだ山の斜面に火を放ち，雑木や下草などを焼きはらう。カレン暦 Dei Nya の初め（6月中旬から下旬）に陸稲の播種をおこなう。播種は焼畑について一般に考えられているように，種を撒播するのではなくて，30センチメートル間隔位に掘棒で浅い穴を掘り，その中に数粒の種を播き，覆土する。陸稲の間作としてはいんげん豆，きゅうり，ごま，かぼちゃ，ヤムいも，タロいも，とうもろこしなどを栽培する。その後カレンは2～3回除草をおこなうだけで，施肥はまったくしない。カレン暦 Chi Mu の中旬（10月下旬から

7) 文化変容の一般的な例にもれず，女性はいまだカレン特有の服装を守っている。

11月上旬）にとうもろこし，きゅうり，その他の野菜の収穫期をむかえ，さらにカレン暦の Chi Sah の初め（11月中旬）から Lah Naw の終り（12月中旬）にかけて陸稲の収穫がおこなわれ，その後にごまが取り入れられる。

焼畑農業のフロンティアーは，19世紀の終りの頃までは人口圧力も低く，したがって森林も豊かだったので，山奥に向って拡大していったように思われる。当時は処女地を開拓していったために，土地の生産性も比較的高く，陸稲は播種量にたいして約50倍ぐらいの収穫があったということである。それが現在では1/5に落ちているということは山地カレンの文化変容を考える上で，注目に価いすると思う。

森林が〝無限〟にあって，誰れでもが自由に耕地のフロンティアーを拡大できるような状況においては，土地にたいする所有権というものは発生していなかった。この段階のカレン族の経済で興味深いことは，水牛が欠如していたことである。また土地生産性がかなり高かったので，生活にもゆとりがあり，かつ耕作面積も相対的に狭くてもやってゆけた。山地カレンには経済的にも時間的にもある程度の余裕があったようである。そのため当時は豊かな民芸品，とりわけ竹細工や織物が盛んであった。それに商品経済の浸透が少なかったのでカレン族の衣服に不可欠の木綿すらも自給をしていたのはこの時代の特徴であった。

ところが今から50〜60年昔にティトパ村のSikīという男がメサリアンの谷に住むラワ族やタイ・ユアン族（Thai-Yuan）から学んできて，村に水稲栽培の技術を導入した。これは一面から見ると人口の増加と過度の焼畑による森林地帯の荒廃にともなう土地不足の現われであると考えられる。

水稲栽培導入の山地カレンの文化にたいする影響は決して少なくない。それは大把みにいって次のように考えられる。

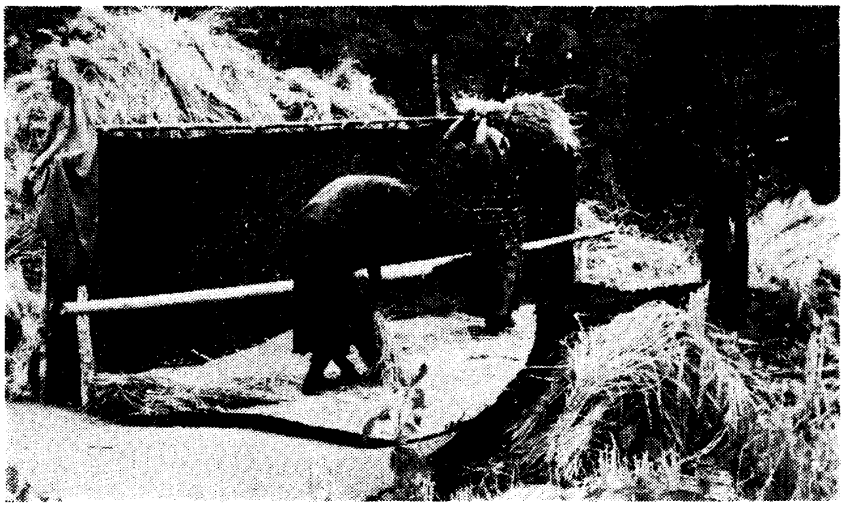
1）山地カレン族の農業技術をもってしても水稲は陸稲よりも収量が安定した。

2）収穫漸減の法則が水稲にはあまり強く作用しないので，連作しても陸稲のように急激に反当収量が減少しない。

3）1）と2）にあるような水田の属性により山地カレンの部落に定着性を増大させたことは疑いない。

竹細工のような手芸はすでに老人だけのものになりつつあるようだ。

4) 水田を開拓したために，山地カレンがこれまでに経験したことの無いような過分な労働を土地にたいして投入した。これは山地カレンの土地に対する考えをまったく一変させた。すなわち，水田耕作の開始によりこのあたりのカレン山村で初めて土地に対する所有権の観念が発生したようである。



焼畑における陸稲の脱穀，外部の者はここに近付けない。

そして水稲栽培の開始によりこの地方のカレン族は水田耕作に使用する役畜が必要になった。水牛がティトパ村に導入されたのはまさにこの時代のことである。さらに水牛の導入は山地カレンの文化に影響を与えずにはおかなかった。それは次の如くである。

1) 水稲栽培を山地カレンの文化の中に根を深くおろさせた。水牛を導入することにより，水田の耕作はたいへん容易になり，同時に一度水牛のような〝高価〟な家畜を導入すると，簡単にそれを放棄することができなくなった。

2) 水牛を山地カレンが飼育し始め，それを販売することによって，焼畑の土地生産性の低下，したがってまた収入の低下をある程度おぎなうことができるようになった。すなわち山地の二次森を利用して水牛を飼育し，平地の農民に売り，多少の現金収入を得るようになる。

3) 水牛の数が増えると，山地に放牧するのにかなりの時間がとられて，文化変容にある種の方向づけがおこなわれるようになった。この水牛導入の頃を境にしてカレン族特有の優れた竹の工芸品や織物が減少し始めたのもけっして偶然ではなかろう。また今日では村の周辺に多数の水牛を放牧するために，植林とか果樹園芸がいささかやりにくくなった事実を指摘しておこう。

以上のような山地カレンの経済の動向に加えてもっとも衝撃を与えたのは1959年にタイ国政府が施行した政令であろう。それにより，あらたに森林を焼却することは一切禁止された。そのため本来の焼畑農業はできなくなり，今日見るように一応は焼畑の形態をとりながらも実際は畑地の7年間隔の輪作，すなわち七圃式農業に転化しなければならなかった。これにより山地カレンの村落は決定的に定着化し，同時に畑地に対する所有の観念をはっきりとこのあたりのカレン族に植えつけたようである。もちろん，水田耕作がこのあたりの土地所有権の発生の契機となったことは前述のごとくである。ちなみに付け加えると，ティトパ村における畑地に

対する私有観念の発生はかなり急速といえよう。それは次のような事実で示すことができる。すなわち，村の70代の長老の一人Pに尋ねると，〝山というものは村人ならば誰れでもどこでも耕すことができる。自分の耕した土地はかならずしも子供が相続しなくてもよい……〟という。ところが現実にはP老人の子供たちは以前P老人が耕していた土地を自分たちの畑にしている。そこでP老人の息子に当る40才に近い村長のKに聞いてみる。〝自分の田畑は親から受け継いだもので，やがて全部を自分の子供に与えるだろう……。〟このようにわずか一世代の間に山地カレン族の土地に関する考え方がまったく違っていることはまことに興味深い。

Ⅲ 社　　会

山地カレンの社会の変化について一番注目に価いするのは long house (hi) の解体であろう。ビルマのカレン族についてはペグー (Pegu) 地区の山地の long house について Marshall が報告しているが，同時に北部タイ国のカレン族の間にもかつてはそれが存在していたということを述べている[8]。筆者の調査によると，ティトパ村には今から 70～80年昔，すなわち前世紀の末頃までは long house が存在していたことが確められた。村の最古老であるR（約80才）によれば〝自分が10才位の時に long house の集会所 (blaw) で皆と食事をしたのを覚えている。その頃は Taluphadu[9] もおこなわれていた。しかし，自分は小さかったのでその頃のことはただ夢のように思い出されるだけである…〟という。このような訳で，すでにティトパ村では long house の社会組織について詳細に知るすべもない。しかし，村民の系譜を調べてみると，〝共通の祖先〟を持った一つの血縁集団とそれに婚姻関係のある者からなっている一種の〝アパートメント〟状の部落であったことだけは確かである。

この long house が今から数十年昔に解体を始め，次第に現在見るような単婚家族もしくは最小拡張家族 (minimal extended family) を一つの単位とする小型の家屋を形成するにいたった。

おそらくこのあたりの山村に当時 Anglo-Siam Lumber Co.[10] がもたらした外的な衝撃も long house の解体におそらく多少の役割を果していると思われる。これについては後にまとめのところで触れることにする。

long house の解体が山地カレンの定着化と無関係でないだろうということも指摘しておくことにしよう。long house はどうやら部落の成員が全体で移動する nomadism を前提として存在していたようである。そのため山地カレンの移動性が低下すると，long house は大事な存在理由の一つを失い，解体の方向に向ったと思われる。この過程により血縁的な色彩の強い社会組織を持つ山地カレンの部落が地縁的性格を持つ契機を作ったことはほぼ間違いない。

8) Marshall (1922) : pp. 56～65
9) カレン族にとっては一番大切な儀礼で，本稿では信仰のところで少し立ち入って述べることにする。
10) 1850年頃仕事をはじめた。その後20～30年の間に会社の影響がティトパ村あたりにも及んできたと考えられる。

long house の解体を前後として，ティトパ村の付近一帯ではカレン族の宗教儀式の中で一番大切な Taluphadu という儀礼が衰退したことは注目に価いする。

long house の解体から現在のような一戸建ちの家屋一これですらも平地のカレンのものよりははるかに簡単であるけれども一になる間にもっと簡素な小屋住いとする半定着段階が存在していた模様である。その時代に山地カレンの定着化を決定的なものにしたのはなんといっても水田耕作の導入であろう。そのことはすでに経済の所で述べた通りである。

ちなみに付け加えると，この移動期→半定着期→定着期という山地カレン社会の変遷の中で，いま一つ目立った変化は婚姻についての変化であろう。

移動時代には新婚の若い男女は2人でまず女の両親の家，次に男の両親の家とそれぞれ長期間滞在したようである。これは bride-price（結納金の一種）や dowry（持参金）が無い山地カレンが双方の両親が養育してくれたことにたいして支払う〝報酬〟のようなものではないかと考えられる。その後若夫婦は双方の両親と別居して新しい家を形成することもあるけれども，条件によっては女の両親，もしくは片親（どちらかが死亡している場合）と住むこともある。このような matri-patri-neo (or matri)-local な婚姻形態は基本的には現在でも同様である。しかしながら，半定着時代になり，long house が解体するようになると山地カレンの間にも個人主義が芽生えたのであろうか[11]，男女双方の親の家に新婚夫婦が留る期間がだんだんと短くなった。

移動時代には所によっては若夫婦は結婚後はじめに女の親の家に約3年，次に男の親の家にさらに3年滞在しなければならなかったようである。ところが半定着時代になると，それが酒を作る間，すなわち数日間留るだけになったといわれる。それが定着時代になり，今日のようになると，ついには双方の親の家に行き，1日だけ滞在して，両親のために米をつくだけになった。このように伝統的な結婚に関する慣行はもはや儀礼的なものに化してしまった。これに似た慣習の簡易化の傾向は宗教儀礼にも現われてきている。それについては次の項目にゆずることにしよう。

Ⅳ 信　　仰

カレン族の〝固有〟な信仰はいうまでもなく精霊信仰である。これについては機会をあらためて記述することにするが，本稿においては山地カレンの文化変容を考えるうえで不可欠と思われる点についてだけ述べることにしよう。

移動期のこのあたりの山地カレンには聖俗両界を支配している Hiko[12] と呼ばれる首長が存

11) ティトパ村のR古老によると，long house 時代に Hiko (socio-religious leader) をしていた祖父のPomohe が死んでからというものは〝人々は子供のようになり，てんでんばらばらになった…。〟という。これはほかならぬ山地カレンにも〝個人主義〟的傾向が強くなったことを示している言葉なのだろう。

12) Sapga ともよぶ

在していた。ティトパ村にも1人の Hiko がいたが，かれは同時に付近一帯のカレン族の数部落，すなわち数軒の long house を影響下においていた。換言するとティトパ村の前身である long house を中心として，いくつかの long house からなる部落連合のようなものが存在していたように思われる。そして前にも触れた Taluphadu という儀礼が年に一度おこなわれ，この部落連合間の社会的紐帯（supralocal solidarity）の確保に役立っていたようである。

Taluphadu は大体次のような儀礼であったと思われる[13]。Taluphadu の talu はカレン語で儀礼を意味し，phadu は大きいということである。この儀礼の別名は Talu Hti K'sa Kaw K'sa ともいう。Hti は水，K'sa は主，Kaw は大地の意味である。すなわち，全体の意味は〝水地の主に捧げられた儀礼〟とも訳せよう。Hti K'sa Kaw K'sa はカレン族の幾多の精霊の中で，もっとも重要なものである。そのためにカレン族は Taluphadu の時に自分の持っている物の中で，もっとも大切な物を Hti K'sa Kaw K'sa に捧げなければならない。通常は豚1頭と鶏1羽とが Hti K'sa Kaw K'sa に捧げられるが，時には水牛（とりわけ平地に住むポー・カレンの村では）がいけにえ（生贄）にされることもある。

家畜のいけにえは通常川のほとりの大木のしたでおこなわれる。この時に村人はその年の罪の告白を Hti K'sa Kaw K'sa におこなう。昔村人は木に登ったり，水にもぐったりすることを要求され，無事にそれをおこないおおせた場合にはその人間は無実となり，もし万一失敗するとその年に悪事を働いたと認定されるのである。

豚や水牛がいけにえにされる時には白色の鶏もいっしょに殺される。両者の血は竹で作ってある祭壇にぬられる。豚もしくは水牛の肉と鶏の肉は料理されて祭壇に捧げられる。その時には Hti K'sa Kaw K'sa にそのあたり一帯の水と大地の平安を祈る。

昔はどうやら Taluphadu に参加する成員がいけにえ用の家畜や家禽を共同飼育して，儀礼に使っていたようである。しかし，近年に近づくとこのような慣習は無くなり，Taluphadu の参加者が金を出しあって家畜や家きん（禽）を買っていけにえにするようになった[14]。

儀礼の最後にティトパ村の場合には出席者一同は long house の広間に集っていけにえにされた動物の肉や内臓を会食した。Taluphadu は成人だけが参加を許され，各戸から少なくとも1人は出席しなければならなかった。したがって，これは部落連合の社会的紐帯を維持するのに役立っていたと思われる。

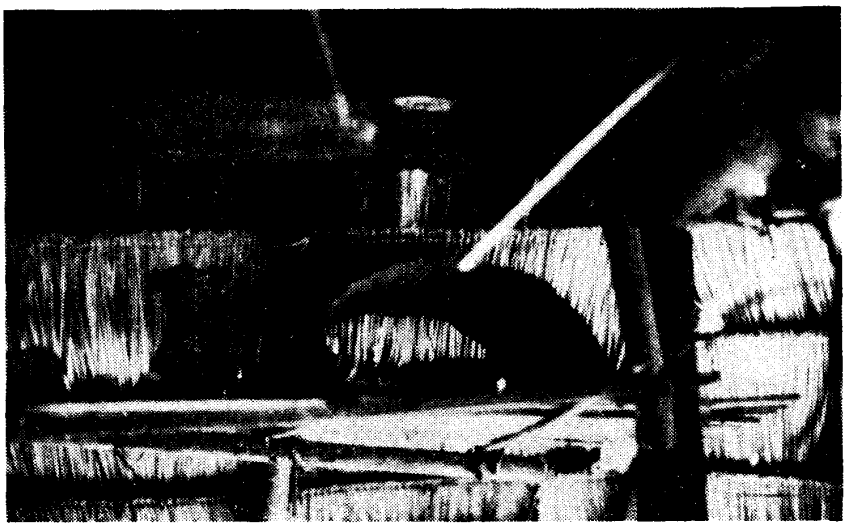
また Taluphadu は山地カレンが移動生活を続ける上で，畑地を適当な場所に獲得するのに不可欠な社会秩序の形成に役立ったことは疑いない。部落連合の中でも，もしそのような社会

---

13) この儀礼は山地カレンの間ではほとんど消滅してしまった所が多いようである。ティトパ村もその例外ではない。そのためここでは Mae Hongsorn の例により，Taluphadu のイメージを再構成しよう。

14) この儀礼には地酒が不可欠である。しかし平地に住むカレンの場合は酒を密造して，警察につかまるのを恐れて，現在 Taluphadu の残っている所でも，酒は金を出しあって買う。近代化の波はこのような形で伝統社会を変えている。

秩序が維持されなければ，焼畑に関する個々の利益が対立して，一種の〝アナキー〟な状態になってしまったであろう。



Pukacha が山地カレンの村に導入した〝仏壇〟の初期的なもの

ところが半定着期になり，山地カレンがあまり村の位置を動かさなくなったので，Hti K'sa Kaw K'sa に対して毎年 Taluphadu をする必要性が少なくなった。1年おきに儀礼をおこなうようになり，やがては4～5年おきになり，ついにティトパ村では消滅してしまった。この間に儀礼のやり方が単純化してきたことはいうまでもない。

このような山地カレンの定着化にともなう儀礼の単純化，もしくは衰退は Talupō のような儀礼にも見ることができる。この儀礼は元来 T'rek T'ha という森林の精霊を慰めるのがおもな目的であった。山地カレンが定着をはじめると，森林を焼却することが少なくなったので，その精霊に儀礼をする必要も減少した。そのためかつては盛んであった儀礼が衰微してきたのは当然であろう。ティトパ村では現在 kwesi という儀礼としてわずかに残存しているだけである。kwesi は Talupō とことなりきわめて単純な儀礼である。例の Hiko が各戸を廻り，地酒を床にたらしながら祈りをあげ，参加者がその後一同で酒を飲むだけである。Kwesi には各自が自分の手首に紐をゆわえる Kisū という儀礼がともなう。

いずれにせよ，焼畑というものは山地カレンにとっては単に農業をするという経済行為だけではなく，山に火を放つことによって森林の精霊を慰めるという信仰生活の一部ででもあった。したがって，焼畑農業が衰微した場合には山地カレンの信仰は物質的基盤を失うので，いくつかの儀礼が消滅の方向に向うのは当然ではなかろうか。

さらに，水田稲作の導入は山地カレンの経済や社会に衝撃を与えただけではない。かれらの信仰生活にも少なからぬ影響を与えたようである。

山地のカレン族にとって，焼畑による陸稲の栽培というものは一番大切な生業であることは今更いうまでもない。そのため，陸稲に関する Baaxa や Sebupo のような農耕儀礼は現在でもたいへんに手の込んだものである。ティトパ村ではあらゆる宗教儀礼がかなり単純化しているとはいっても，陸稲栽培に関係のある農耕儀礼は他のものに比べて相当厳格に守られている。筆者もその儀礼に参加観察することに全力をあげたが，いつもはたいへん友好的な村人もことこの儀礼についてはきびしい態度をとった。言を左右にして，ついに観察する機会を与

えてくれなかったほどである。

陸稲の脱穀にはたいへんに強いタブーが存在している。脱穀する場所は畑に作られるが，脱穀をする当事者以外はたとえ村人といえどもそこに近づくことは禁じられる。初めの儀礼から参加して，脱穀が終了するまで手伝わなければ，その脱穀ある所にはいっさい近づくこともできない。

Talupō の儀礼がわずかに姿を留めている Kwesī の儀礼，右の老人は Hiko。

ところがこのように焼畑農業に関しては面倒な儀礼がともなうにもかかわらず，水田稲作に関してはまったく儀礼が存在していないのは興味深い。部落のカレン族の説明によると〝水田の精霊があまり強くないから，特別の儀礼をやる必要がない……〟ということである。しかもその精霊たるや名前を尋ねても，村人は名前すらもしどろもどろになるような程度の関心しかない。これは換言すると，水稲のこの山村への導入が比較的新しいために，まだ水田稲作文化が山地カレンの文化に〝混合〟した程度の状態だからであろう。それに対して平地に住むカレン族文化は水稲作にも儀礼をともなうほど水田稲作文化と〝化合〟現象をおこしている。したがって，水田稲作に関してティトパ村のカレン族は一種の〝精神的真空状態〟に置かれていて，文化的にはきわめて不安定な状態にあるといえよう。水田による稲作をこの山村に導入したことにより，平地と山地の間に文化的なパイプができたと理解してよかろう。そのパイプを通して，平地民の稲作儀礼が山地カレンの不安定な水稲文化に侵入してくるのではないかと思う。このように二つの文化の間で一度チャンネルができると，それを窓口につぎつぎとほかの文化が入り込む現象は文化変容を考えるうえできわめて重要だと思う。

カレン族の文化変容を考える時に見逃せない今ひとつのものに Oxe[15] （または Obwa） の儀に関する変化がある。

この Oxe の儀礼の司祭者 (Pi) はポー・カレンの場合だと男でも女でもなることができる。しかし筆者の調査しているスコー・カレンでは女性のみがその役に当ることができるといわれている。通常は一家の主婦が Oxe の儀礼の司祭役をする。それは主婦が一家にとって一番大切な食物を取り扱うためだといわれている。もしその年に彼女が〝罪〟を犯していると，

15) このXはドイツ語の ch 音に近し。

その一家は次の年に食糧不足に見舞われるという。ポー・カレンの場合には，もしPi，すなわち司祭役をする主婦が病気のときや死亡しているときには，男系の祖父がその役を代行できる。けれどもカレン族によると Oxe の効果が半減してしまうという。

スコー・カレンの場合には，もし主婦が病気で Oxe に参加できないときや死亡しているときには，長女がその役を代行する。そして，長女がすでに嫁にいっていた時には次女，娘がいない場合には孫娘が Pi の役割を果す。しかし，万一その家に Pi の役目をする女性がいない時には Oxe をおこなうことはできない。

Oxe の儀礼には司祭者 Pi の両親以上の世代は招かれないが，子供や孫たちは万難を排して出席することが要求される。もしどうしても出席予定者が参加できない場合には陰膳が用意される。このようにして，Oxe の儀礼はカレン族における家族の成員間の社会的紐帯を保持することに役立っていたことだけは間違いがない。

ちなみに付け加えると，Oxe の儀礼は大体次のようにおこなわれる。まず豚がいけにえに供される。殺し方はスコー・カレンの場合は刺し殺すのを常とするが，ポー・カレンの場合には絞め殺すか豚の口から水を入れて溺死させるという。殺された豚はいったん家の中に運び込まれ，参加者によって精霊に祈りが捧げられる。豚は火でよくあぶられて，スコー・カレンの場合だと女性の司祭者が豚の心臓を取り出し，それによって次の年の運勢をうらなう。豚の首は切り離され，籠に入れて鶏や酒とともに森林に持ってゆき，damuxa というカレン族が一番恐れている精霊に捧げられる。豚の肉や内臓は祈禱をあげた後に出席者や村人の間に分配され，食べられる。

Oxe は原則として家族の全員を集めなければならず，そのうえにこれをへたにおこなうとかえって悪影響があるという。そのためカレン族にとって実にやっかいな儀礼である。これは大事な儀礼には違いないが，カレン族も内心ではいささか面倒に思っていたことだけは間違いない。ところがこの10年ほどの間に，シャン族などのタイ系の平地民がこのあたりにやって来て，Chakachi という簡単な儀礼をおこなうことにより，一部の村人に Oxe を中止させた[16]。ティトパ村での Chakachi による Oxe 儀礼を中止した第一号は驚くなかれ村の精神的指導者である Hiko のR老人である。この一例だけ見ても，山地カレンが Oxe をいかにうとましく思っていたかということが解る。R老人は著者にこっそりと〝Oxe を止めてほんとうにほっとした〟と告白していた。

このほか山地カレンの文化変容を考えるうえで，一番注目に価いするものは Pukacha であろう。Pukacha とは一種の仏教行者の呼称である。その行者は数年前にこのティトパ村のあたりにやって来て，何人かの村人を Doi Khun[17] という所にある仏教寺院に連れて行った。

16) この意図ははっきりしない。
17) Doi とは北タイ方言（Kha Muang）で山という意味。

Pukacha がそのようなことをした意図ははっきりとしないのであるが，どうやら Doi Khun に仏塔 (Chedi) を作る運動の一環のようであった。Doi Khun では村人は金を少し出し合って花やローソクを買って寺に捧げたという。行者はその時ティトパ村のカレン族に各戸に仏壇まがいの簡単な棚を作ることをすすめ，花や水をそなえるように教えた。その祭壇には現在までのところ，仏像はおろか，仏陀や聖者の絵や写真すらもなく，村人は供え物をすることにより，何か現世的な御利益を期待しているだけである。ティトパ村の山地カレンは現在のところ平地の仏教信仰と家の祭壇を結びつけて考えてはいないようだ。むしろ，村人の一部にはカレン族に〝固有〟の精霊信仰と結びつけて考えている者もある。しかし筆者の目から見ると，この祭壇は疑いなく，平地の仏教文化が山地カレンの文化に侵透してきた先駆であることだけは間違いない。現にメサリアンの谷間にある平地カレンの地ではこの種の祭壇に仏教の聖者の写真がはってあり，仏壇になる一歩手前までいっている所もある。

V 政　　治

まず村落レベルの政治について述べることにしよう。移動時代におけるティトパの long house にはどうやら純然たる意味での俗界の指導者はいなかったようだ。前述の Hiko という精神界の指導者がそれを兼ねていたと思われる。すなわち，この段階のカレン社会は〝祭政一致〟していたのだ。

現在たどりうるこの種の最後の指導者は Pomohe という男で，今の Hiko の2代前，村長の3代前にあたる[18]。当時 Pomohe はティトパの前身である long house はもちろんのこと，周囲にあるいくつかの部落＝long house にも影響力を持っていた。Pomohe はおそらく有能な男であったのだろう。内部から崩壊の危機をはらむ long house とティトパ付近の部落連合の分解をかろうじて押し止めていたようである。Pomohe の死後 long house は解体に向い，部落連合も分解してしまった。それと機をいつにして，部落間をつないでいた社会的紐帯を保持するのに強力な機能を果していた Taluphadu の儀礼も衰退の方向に向った。

部落連合会が消滅した後の各部落はそれぞれ〝独立〟した村になり，各自の Hiko を持つようになる。

山地カレンの社会がこのように変容しつつあった時に，このあたりをめぐる高いレベルの政治はどのように変化したか，そしてティトパ村のようなカレン族の山村はそれとどんな関係を持ったか一瞥してみることにする。

ティトパ村には歴史的な記録が皆無なので，はっきりとしたことはわからないけれども，19世紀の前半にはチェンマイのプリンス (Chao)，もしくはランプーンのプリンスがこのあたりを支配していたと思われる。ところが1877年になると，バンコックを中心とするシャム政府のラ

18) Hiko と村長はおじ，おいの関係にある。

マ五世（Rama V）がチェンマイに Phyatep Worachun という Resident Commissioner を送った。すなわち，この頃を契機として現在の北部タイ国一帯は次第にシャム政府の影響下に入った訳である。

しかしながら，当時の北部とバンコックとの関係は年に一度入貢する程度のゆるい政治的関係に過ぎず，それがおそらく1910年代の初めまで続いたのであろう。この間ティトパ村のカレンは上部の政治的変化にまったく関係なく，チェンマイ（もしくはランプーン）のプリンスに手織の大幅布（yadoti）2枚を毎年入貢していた。

今世紀に入り，チェンマイやランプーンの王国が政治的に完全にバンコックの中央政府のもとに統合されるに従って，ティトパ村のような山奥の村にも変化が現われてきた。それまでは村は自生的な Hiko によって治められてきたのであるが，この頃になると中央政府はメサリアン地区の出先機関を通してティトパ村に村長（Ke）を任命した。これによってこの山地カレンの社会では leadership に関して聖俗が分離したのであった。初代の村長Pは現村長Kの父親であり，今の Hiko であるR老人の弟に当る。そのため，形式的には村に関する政治組織に大きな変化があったが，実質的には同じ系譜の者で村の leadership を独占しているので，leadership について本質的変化はまだ現われていないと見てよかろう。

このように政府による村長の任命がすでに数十年も昔からあったにもかかわらず，山村に対する中央政府の影響は数年前までは紙上行政の域をあまり出なかった。しかし，最近ではティトパの村長Kは政府から月給をもらい平均して月に一度位はかならず会議のためにメサリアンの役場（Amphur）に出て行くし，時には郡長（Kamnan）もこの辺にやって来る。このように中央政府の影響力は次第に山村にまでおよぶようになった。

Ⅵ　ま　と　め

ここで山地カレンの社会がどのように変化をしてきたかを明確にするために，約1世紀の間を移動期，半定着期，定着期の3段階に分けて，経済，社会，信仰，政治などがそれぞれの段階でどのようにからみ合っているか一瞥してみることにしよう。

1）　移動期（約半世紀ほど前まで）

この時代の特徴は人口圧力が比較的低かったことである。森林も豊かにあり，焼畑をするのに事欠かなかった。一定の地域が焼畑により荒廃すると，ちゅうちょなく long house の場所を他に移すことができた。そのため long house のように一時に成員全体が移動できる部落構造が当時の経済組織に適合していた。

この頃，ティトパ付近では long house が数戸集って，一種の部落連合を形成していたようである。その部落連合は1人の Hiko と呼ばれる聖俗両方を兼ねた首長によって指導されていた。このような社会のあり方は信仰生活の上にも反映していた。Taluphadu という大がか

りな儀礼が毎年おこなわれていて，そのたびに Hiko の下にある数部落の者が集って儀礼をおこなった。かくして，Taluphadu は部落間の社会的紐帯を確保するのに役立っていたのであろう。

政治のうえではチェンマイもしくはランプーンのプリンスがこのあたりを支配していて，いまだバンコックを中心とするシャム政府の影響は及んでいなかった。

2) 半定着期（6～10年昔以前）

この時代に入ると，人口圧力にともなう森林の荒廃や土地生産性の低下のために，山地カレンも移動期のように焼畑農業だけでは生活がしにくくなったようである。ティトパ村の村人も次第に水田による稲作の技術を平地民から採用しなければならなくなった。

水田農業はたとえ無肥料でおこなっても，焼畑のように毎年場所を移動する必要はない。それは灌漑水により天然窒素などの肥料分がたえず補給されているので，畑地農業ほど収獲漸減の法則が急激に作用しないからである。

また，水田を開拓することは焼畑のような簡単な農作業ではない。山地カレンが一度水田を開拓するために多量の労働力を土地に投入すると，当然のことながら，かれらの土地にたいする考え方を根本的に変えなければならなくなった。以上のような理由で，山地カレンの社会は定着化が進むとともに，かれらに土地所有の観念が発生したのである。

水牛導入もこの時期のことであり，それが山地カレンの文化に与えた影響が少くなかったのはすでに述べた通りである。

山地カレンが定着化するのと機をいつにして long house が解体した。これを促進したものに Anglo-Siam Lumber Co. のこの地方にたいする進出があろう。

山地カレンはこの会社のチィーク材伐採やその運搬のために，労働者や象使いとして雇われはじめた。それは次のような影響を山地カレンの文化に与えたと考えられる。

1) 経済的には賃金を得ることにより，これまでの物々交換の経済に貨幣経済を導入した。

2) 社会・宗教的にはそれまで山地カレンは野山に住んでいる damuxa という精霊を恐れて，遠出する時は団体行動をとっていた。ところが伐採場で働いたり，チィーク材を象で運んでいる間に，1人でも森林の中を動き廻れるようになった。

以上の経済・社会・宗教的理由により，山地カレンは良い意味でも悪い意味でもある程度個人主義的になったことは充分に考えられる。その傾向が long house 解体に大いに拍車をかけたことは疑いない。

この頃に long house のみならず部落連合が解体したり Taluphadu が消滅したが，この〝個人主義〟的傾向と無関係ではなかったであろう。

long house 一つ一つが核になって1戸建ての小屋がいくつか集合した自然村はこの頃に発生したのである。こうなると，部落連合を支配していた本来の Hiko は消滅して，各自然村

単位に新しい Hiko が生れてきた。

この時代の初期には，山地カレンが定着化したとはいっても，家はまだ小屋程度で，村に病気などがたくさん発生すると，精霊のたたりを恐れて村を１キロメートル位は時には移動させていたようである。

半定着時代の中頃を過ぎると，チェンマイやランプーンのプリンスはもはやシャム政府の後を受けたタイ国政府[19]のもとにあり，そのためメサリアン地区の山村も中央政府の紙上行政がしかれるようになる。Hiko とは別の村長がメサリアンの役所を通して，政府に任命されるようになり，聖俗の leadership が分離された。

税は人頭税のようなものが現金で支払われるようになったのもこの頃の特徴である。

3) 定着期（1950年代以後）

1959年に施行された中央政府の政令により，森林の焼却による焼畑農業が一切禁止となった。そのねらいは第１にタイ国の中央平原をうるおす大きな河川の水源地にあたる森林を荒廃から救うことと，第２には奥地でおこなわれている麻薬の原料になるけし栽培を押えるための措置であった。

この行政措置により，カレン族をはじめとする山地民の移動性はほとんど完全に失われたように思われる。そのため，ティトパ村では伝統的な焼畑農業は〝七圃式〟農業に変化せざるをえなくなった。すなわち，新規に森林を焼却できなくなったために，すでに焼畑をやって切り開かれた山腹で，７年間隔のローテーションをしなければならなくなったのである。７年に１度同じ場所に帰って来るのでは，施肥すらもしないこの辺のカレン族の農業技術をもってしたのでは，とても地力の回復はおぼつかない。したがって，畑地における土地生産性の低下は当然のことである。そのうえ村の付近には山岳地帯のため水田の適地が無いので，ティトパ村の住民は畑地の面積を多少拡大しながら，陸稲の粗収量の低下をくい止めて糊口しているように見受けられる。

農作業にこのようにして時間を多くうばわれるようになったために，カレン族特有の手芸，特に手のこんだ竹細工や手織の木綿布などが近年急速に姿を消し始めたことは見逃せない。それと同様の理由と経済的な窮迫のために，儀礼や風俗の簡易化も進みつつあるように思われる。

このように政府の山地民定着化政策はカレン族にもかなりの衝撃を与えた。その中でも畑地に土地所有の観念を発生させたことは，今後山地民問題を考えるうえで一番大切なことであると思う。

信仰のうえでは Pukacha のような行者を通して低地からの仏教系文化が山村に入り出し

19) 1939年まではシャム政府と呼んでいた。なお戦後1945年から1948年の間タイ国政府は一時的にシャム政府と改称したことがある。Fitzsimmons, (1957), p.21

The Simplified Process of Culture Change in a Hill Karen Village

Stages \ Settings	Economic	Social	Political	Religious	Dress & Style*
Nomadic Stage (until about a half century ago)	·Swidden agriculture ·No land-ownership ·No water buffalo ·Elaborated handicrafts ·Tax: Two cotton blankets a year to the Chiengmai or hamphun Prince	·Long house hamlet ·Association of several long houses ·Matri-patri-neo(matri) local marriage (Long residence in Parents' house)	·Chiengmai or Lamphun Prince rule ·A *Hiko* is socio-religious leader for several hamlets	*Taluphadu*	·Male long dress ·Karen dress for all males ·Long hair for males ·Tatoo to knees ·Ear-rings for males
Semi-nomadic Stage (until about 6~10 years ago)	·Swidden & Wet rice agriculture ·Land-ownership for wet rice field, but none for upland field ·Introduction of water buffalo ·A few handicrafts ·Tax: Monetary head tax to the government	·Hamlet consists of some huts ·Weak supralocal solidarity ·Matri-patri-neo(matri) local Marriage (Staying in the parents' houses is only several days)	·Government paper-administration ·Leadership is divided into secular & religious one ·Government-appointed headman dejure	·*Taluphadu* disappeared ·Neighboring hamlets start to have each *Hiko* ·*Talupō* simplified	
Settled Stage	·Upland rotation (Seven Field System) & wet rice field ·Land-ownership for both wet rice field & upland field ·Tax: Land & Cattle tax	·Village consists of settled houses ·Mafri (Neo)-local marriage (Traditional marriage-custom has become merely ceremonial)	·Government administration ·Government-appointed headman de facto	·All ritual activities simplified ·Slight plain emulation through *Pukacha* ·Declining of *Oxe*	·Thai style dress for many males ·No long hair for males ·Less tatoo ·Few ear-rings

*Female style has not been changed as remarkably as male's.

た。また Oxe のような家の精霊にたいする儀礼が衰退し，家族の紐帯がゆるむきざしが見え出したこともこの時代の大きな変化の一つである。

山地カレンの間に根をおろし始めた水田稲作の文化が一つのチャンネルになり，同時に交通が便利になったことも影響して，山地のカレン族の間にも次第に低地からのタイ系（もしくはシャン系[20]）の仏教文化が浸透してくるのではないかと思われる。

この時代になると，村長とメサリアンの役所との関係も一段と緊密になり，それは紙上行政の域を越えつつあるように考えられる。税の上でも人頭税はタイ人並の地税や家畜税に変ったことも見逃せない変化であろう。

このように山地カレンにたいする仏教系文化の波及，そして中央政府の影響を知る時，筆者は国民形成の姿をかいま見る思いがする。

まだ調査なかばなので，ティトパ村のようなカレン族の山村と市場経済との関係に充分触れることができなかったのは残念である。しかし，筆者の印象ではティトパ村の住民が〝市場経済〟と直接接触を持つようになったのはこの１～２年である。それは村から約２キロメートルほどの所に道路工事の飯場ができて，２～３軒の店のようなもの[21]が開かれてからのことであろう。しかも，山地カレンの経済は自給的性格が強いので，たとえ〝市場経済〟と物理的に距離が近くなってもその影響を受けることは今までのところは比較的少いように思われる。

最後に本稿で述べてきた山地カレンの文化変容について整理して，それを図示することにより結語に代えることにしよう。　　(1965年１月20日記)

参　考　文　献

1. T. Fitzsimmons (ed.) : Thailand, HRAF, New Haven, 1957. x＋528.
2. C. Levi-Strauss : Structural Anthropology, Basic Book Inc. Publisher, New york & London, 1963. xvi＋410.
3. H. I. Marshall : The Karen People of Burma, The Ohio State Univ. Bulletin, Columbus, 1922, xv＋329.
4. G. Young : The Hill Tribes of Northern Thailand. 2nd ed., Siam Society, Bangkok, 1962. xiv＋92.

20) シャン族はビルマからタイ国の北部にかけて分布するタイ系の住民である。
21) 普通の家に雑貨をひとならべしたもので，とても店といえるものではない。